

ズボンかスカートか

筑紫野南中学校一年　小島　愛華

「私、ズボンにする。ズボンの方が動きやすいし。小学校でもスカートをあまりはかなかったから。」

中学校の制服を選ぶとき、女子でも制服にズボンがあってうれしかった。

「母さんの中学校のころは、女子の制服はみんなスカート。男子はみんなぼうず頭というきまりだったよ。」

と、母が言った。昔と今ではずいぶん違うことに驚いた。

しかし、私はズボンとスカートの両方を買ってもらった。制服を注文するとき、

「女子でズボンをはいてる人は、まだ少ないですよ。」

と言われ、迷ってしまったのだ。

入学式は、私にとって特別な日だ。本当はズボンで行きたかったけど、

「スカートで行った方がいいよ。みんなスカートかもしれないよ。」

と母に言われ、私は仕方なくスカートをはいた。私がどうしたいかではなく、みんなと同じようにすることになったのだ。いつもは、「自分の考えを持ちなさい。」と言うくせに、こんな時は「みんなと同じ」と言うのはおかしいと思った。

入学式の中で、私はズボンをはいている女子が気になって仕方がなかった。入学式という特別な日に、自分の着たい制服を着ている友達がうらやましかった。

ズボンのことを考えているうちに、あるテレビドラマのことを思い出した。

「ファースト・デイ わたしはハナ！」というドラマだ。中学生のハナが、本当の自分として生きる最初の一步を描く物語だ。ハナはトランスジェンダー。小学校までは男の子として生活していた。中学校に進学する機会に、名前も服装も変える決意をした。

学校はハナを女の子として受け入れた。ただし、トイレは保健室の「だれでもトイレ」を使うという制約つきだ。ハナ自身「同級生にトランスジェンダーだと知られたらどうしよう。」と、不安に思いながら学校生活を過ごした。

このドラマを見て、私はハナはすごいと思った。同じ中学一年生で、不安もたくさんあったのに、自分らしく生きようと一生懸命に考えているところが、私とは違うと思った。

自分らしく生きることとは、とても大切なことだ。入学式の次の日、私は迷わずズボンをはいて登校した。なんだか自分らしくなったと思った。すると、私の変化を感じた父が、ある話をしてくれた。

「愛華が住んでいた台湾は、自分らしく生きやすい国なんだよ。」
そして私は、私が小学二年生までいた台湾が、アジアで初めて同性婚を認めた国だと知った。

「台湾にいたことで、自分らしく生きることの大切さを知らず知らずのうちに学んでいたのかもしれないね。」

父の言葉を聞き、みんなとの違いがたくさんあることは、決して悪いことではないのだと感じた。

私にとって制服は、自分らしさについて考えるきっかけだった。

私は、入学式の出来事のように、みんながしてるからで物事を決めたくない。

私がどうしたいか、このことを尊重しないと、自分らしさは消えてしまう。

これから私は、いろいろな人に出会おうだろう。女性とか男性とか、大人とか子どもとか、障がい者とか健常者とか、日本人とか外国人とか。私はそうした違いにまどわされることなく、その人らしさを大切にしたい。今、日本は変わりはじめていくという。その人のよさや考えを認め、全ての人が、自分らしさを楽しみながら生きていくことができる、明るい社会にしていきたい。

自分のやり方で。